

野長

ひとりごと

82

斉藤

讓



夕映えに染まる野山や
家並みには、どこことなく
哀感が漂い、吹く風にも
早や微かに冬の気配が感
じられる時節となった。

まさに晩秋であり、不況
の中とはいえ平和国家日
本の豊かな秋である。この
平和は、粉れもなく半世
紀前、不幸にして起った
あの大战の尊い大きな犠
牲の上に築かれたもので
あり、これを享受する私
達現代人は、決してこの
ことを忘れてはならず、
長く後世に語りつぎ、揺
ぎない平和を維持してゆ
かなければならないと思
う。細川総理大臣が就任
の折、先の大戦は日本の
侵略戦争であり、多大の
被害を与えた諸国に陳謝
する旨の発言をされた。
この発言をめぐって賛否
両論、国内の世論は沸騰
した。

▼日本軍の侵略は明白な事
実であり、当然のことであ
るとする賛成意見。反対意
見は、欧米先進国をはじめ
多くの国の歴史をみれば、
大同小異の戦争によって領
土を拡張したり、支配して
きたのも事実である。日本
は当時列強各国に追いつめ
られて、やむにやまれずの
戦いであった。戦後いち早
く講和条約を結び、しかも
終戦から半世紀もたった
今、何事に殊更にこんな発
言をしなければならぬの
か。また、ひたすら祖国の
平和を念じながら戦場に散
華した英霊や遺族の心中を
何とthinkかといった意見が
続出した。

戦いに聖戦なしといわれ
るが、戦争は見方、角度に
よってその評価は大きく異
なってくる。一片の言葉を
もってこれを断罪するに
は、あまりにも巨大深遠で
あり、複雑多岐な要素が
らみ合っていて、例え歴史
の光を当てても、その全貌
を明らかにすることは到底
不可能なことである。いま
確かなことは、あの大戦を
教訓として、どんなことが
あろうと
も絶対
に戦争とい
う過ちを
再び繰り返
かえして
はならぬ
ということ
である。そ
れ以外に英
霊に報いる道はなく、日本
の生きる道もないと思う。

晩秋に思う



と私は思っている。
遺族の家庭に不幸があれば、瘦身を自転車に乗せ、どこへでも出向き、心に沁みる弔辞を述べ、また慰霊祭や遺族会総会などでは、心から遺族を励まされた。また靖国神社の国家護持を強く訴え続けてもこられた。私心のない一途なその姿勢は、多くの人々を感動させずにはおかなかった。その平野さんが、一陣の秋風に誘われるが如く惚然

まささん、五ノ神の伊藤美さん、傍席戸の古川タカさん、齋藤ひでさんなどの顔もあつた。みんな若くして夫を戦争で失ない、筆舌に尽せない辛酸をなめてきた方々ばかりである。
「本当に立派な会長さんでした。どんなに私達は励まされてきたことか」と吉田さん、伊藤さんは口を揃えて語り、その死を惜しんだ。読経の最中、彼女らが何度もハンカチで目頭を押さえるのを目にした。きっと、彼女達の胸の中には、まるで夫や親を失くしたかのような深い悲しみが去来しているのであろう。思わず、私の胸の中にも熱いものが込上げてきた。
平野さん、ほんとうに長い間ご苦労様でした。心から感謝をいたします。残された遺族の皆さんも、だいぶ年老いてきました。どうかこれからは、天国から彼女らの行く末に、尊いご加護を賜わりますようお願いいたします。

▼ところで、日本はその敗戦の灰燼の中から、耐乏と忍耐によって平和を蘇らせ、経済国家を築きあげてきた。今日の繁栄は、世界の驚異だといわれている。しかし、長く続く繁栄の陰で、私達はいつしかあの当時の忍耐や他人を思いやる気持ちを失なってきたしまったような気がしてならない。「衣食足りて礼節を知る」という古い諺もあるが、現代は衣食足りて礼節を忘れるの感がある。
どこの家も立派になり文化生活を享受しているのにかかわらず充足感が得られず、常に不満を顔に出している人。わが家だけは清潔にして、公徳心を捨て去る人。まさに今、自分さえよければという利己主義が、日本中を徘徊しているのである。若しこの状態が続くならば、今日の平和や繁栄も、砂上の楼閣に帰することであろう。それで、祖国の平和を願い生命を散らした英霊に、果して顔向けができるであろうか。